

「日本人の国民性調査」の二次分析の試み

—宗教意識に関する質問諸項目をめぐる理論的考察と方法論的検討—

真 鍋 一 史

I. はじめに

本稿は、大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 統計数理研究所の知的財産の一つである「日本人の国民性調査」の「二次分析 (secondary analysis)」をとおして、日本人の宗教意識の諸相・構造・性格を探る理論的・方法論的な試みである。ここでは、このような本稿の執筆の経緯にかかわる以下の点について、簡潔に説明しておきたい。

本稿で二次分析に取りあげる「日本人の国民性調査」は、1953年以来、5年に一度、統計数理研究所によって実施されてきた継続調査であり、日本が世界に誇るべき貴重な社会調査の一つである。この調査研究の歴史・方法・成果については、すでに夥しい情報が利用可能となっている。この点については、統計数理研究所のウェブサイトを参照されたい (<http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/index.html>)。調査データの一般公開はなされていないが、今回、「ROIS - DS - JOINT / 一般共同研究」をとおして、そのデータの二次分析の機会が与えられることになった。この共同研究の内容は、つぎの二つに分けられる。

(1) 「日本人の国民性調査」の素データ (raw data) を、共同研究のメンバー間で共同利用が可能となる形に整備するというデータ処理作業と、そこでの問題点の発見と、その解決策の提案である。この作業は、「日本人の国民性調査」の素データを、将来、国内・国外に向けて一般公開していくことを視野に入れた、それに向けての準備作業という位置づけがなされるものでもある。

「日本人の国民性調査」の二次分析の試み

—宗教意識に関する質問諸項目をめぐる理論的考察と方法論的検討—

(2)「日本人の国民性調査」データの二次分析のさまざまな実践である。一般に、「一次分析 (primary analysis)」が、社会調査を実施して、データを収集し、それを分析することを指すのに対して、そのようにすでに収集されたデータを用いて、新たな理論・仮説・方法にもとづいて、新たなデータ分析を行ない、新たな知見・解釈を導きだすことを「二次分析」と呼ぶ。このような二次分析の試みは、Herbert H. Hyman (1972). *Secondary Analysis of Sample Survey*, Wesleyan University Press 以来、すでに半世紀にわたる研究の歴史があり、社会科学の領域においては、いまや世界的に一つの大きな潮流となってきた。それによって、「社会科学の領域における理論・モデル・仮説の検証」「統計学——とくに社会統計学——の領域における理論・モデル・方法の構築」「データ分析の技法の開発」などが可能となり、それによってこの研究領域にブレークスルーがもたらされることになるからにはほかならない。このような社会調査データの二次分析の発展を示す reference study の一つとして、Max Haller, Roger Jowell and Tom W. Smith eds. (2009). *The International Social Survey Programme 1984-2009: Charting the Globe*, Routledge をあげることができる。じつは、このような成果こそが、われわれの共同研究においてめざすべき大きな目標といえるものなのである。

なお、二次分析の歴史・現状・課題については、筆者によるつぎの文献を参照されたい。真鍋一史 (2012)「特集 データ・アーカイブと二次分析の最前線 社会科学はデータ・アーカイブに何を求めているか」『社会と調査』(社会調査協会：有斐閣)。

Ⅱ. 二次分析のテーマと文献研究

1. 二次分析のテーマ

「日本人の国民性調査」の質問諸項目の内容は多岐にわたっており、それらは国民性調査委員会の分類にもとづかならば、「個人的態度」「宗教」「家」「身近な社会」「男女の差異」「社会的問題」「政治的態度」「日本人・外国人」などさまざまなテーマに分けられる。本稿の二次分析においては、「宗教に関する

質問諸項目」——これは、「国民性調査委員会」の用語であって、筆者の用語でいうならば、「宗教意識」と表現される人びとの「ものの見方・考え方・感じ方・行動の仕方」を捉える質問諸項目——を取りあげる。このようなテーマについての本稿での議論は、質問諸項目の「内容」とその社会科学——本稿で社会科学という用語を用いる場合、筆者が中心的に考えているのは、心理学、社会学、政治学である——的な「概念化（conceptualization）」に焦点を合わせるものであるが、この点については、後に、章を改めて扱うことにする。したがって、ここでは、なぜ筆者が二次分析のテーマとして「日本人の宗教意識」を選ぶに到ったかについて述べておきたい。

(1) このテーマが、筆者の、これまでの研究テーマの線上にあるということである。筆者は、これまで社会科学の領域において、Berger と Luckman, 山口訳（1966 = 1977）によって「主観的現実（subjective reality）」と呼ばれた、人びとの「ものの見方・考え方・感じ方・行動の仕方」の側面に焦点を合わせるさまざまな国際比較研究に取り組んできたが、その線上で、人びとの「幸福感と満足感」「ナショナル・アイデンティティ」「政治意識」「家族・仕事・結婚観」「対人信頼感」「言語意識」「価値観」「科学技術観と環境意識」「外国イメージと国際意識」などとともに、「宗教意識／宗教性」というテーマに導かれることとなった。国際比較の視座からする「宗教意識／宗教性」のデータ分析は、2000年以降の筆者の主要な研究テーマの一つとなってきた。そして、まさに、その延長線上に、「日本人の国民性調査」の二次分析にもとづく「日本人の宗教意識の諸相・構造・性格」という研究テーマが位置づけられることになるのである。

(2) 日本の宗教社会学の研究の系譜をたどるならば、宗教意識というテーマがすでに長い研究の歴史を持つものであることがわかる。ところが、そのような先行研究については、つぎの二つの問題点が指摘できる。

①これまでの調査研究の多くが、「フィールド・リサーチ」や「自由面接法」

などの質的な方法にもとづくものであり、「質問紙法 (questionnaire method)」を用いた量的な方法にもとづく調査研究はまだ少ない。かつて丸山真男(1956)は、日本の政治学の現状について、「日本では操作上の有効性の見地から驗されない根本概念や本質論が氾濫していて、それにくらべてデータの収集が圧倒的に不足している」(p.15)と指摘したが、この指摘は、「量的データ」という点からするならば、現在の日本の宗教社会学にとっても当てはまるところが大きいといわなければならない。

②日本における宗教意識の研究においては、「比較」という視座が十分に取り入れられてこなかった。比較には二つの異なる次元がある。一つは「時間的な比較」であり、もう一つは「空間的な比較」である。ここでの宗教意識の研究についていえば、前者はその「時系列分析」であり、後者はその「文化比較／国際比較分析」である。「日本人の国民性調査」のデータは、一方で宗教意識の「量的分析」を可能にするとともに、他方で、その「時系列的分析」および「文化比較／国際比較分析」を可能にするという点において、まさに日本の宗教社会学の研究領域への貢献を約束するものとなるといえるのである。

(3)「日本人の国民性調査」の一次分析としてなされてきた研究成果から、「日本人の国民性」を特徴づける主要な項目・次元・尺度として以下の三つがあげられている(林知己夫と林文, 1995; 吉野, 1994; 1998; 2001)

①伝統的・近代的なものの見方・考え方・行動の仕方

②義理・人情という人間関係のあり方

③「信仰は持たない」が「宗教的な心は大切だと思う」という宗教的感覚
そして、そうだとするならば、「日本人の国民性調査」の二次分析にとっても、筆者の用語でいうところの「日本人の宗教意識」に関する項目・次元・尺度というテーマは、重要な研究課題の一つであることは間違いないであろう。

以上が、筆者が「日本人の国民性調査」の二次分析のテーマとして、「日本人の宗教意識」を選ぶに到った理由である。

2. 日本人の宗教意識というテーマをめぐる先行研究の渉獵と精査

「日本人の国民性調査」は1953年以来、5年に一度実施され、2013年に第13次調査が完了し、現在は第14次調査の準備が進められている。これら13回の調査結果については、一次分析の結果が、単行本・論文・報告書などの形で出版されてきている。ここでは、それらすべての研究成果から、「日本人の宗教意識」に関する記述を抽出し、その精査を網羅的に試みるというのではなく、それらのなかから主要な研究成果と考えられるものを選び出し、それらに焦点を合わせて、そのような精査を行なうのである。それは、そのような研究成果の精査が、筆者による二次分析の出発点を確認することを第一の目的とするものであるからにはほかならない。

以上のような「日本人の国民性調査」の一次分析という形でなされてきた研究成果——単行本・論文・報告書など——をめぐる文献研究をとおして、少なくとも以下のような点が確認できる。

(1) ここで取りあげた先行研究においては、宗教意識の内容(諸相)を表現する用語としては、さまざまなものが使われてきている。ここでも、それらを「網羅的に取りあげるという仕方」ではなく、筆者が「気づいたものを取りあげるという仕方」で、あげてみるならば、そのリストは以下ようになる。

信仰(林知己夫, 1995, p.70; 林文, 2010, p.194)

信仰心(林知己夫, 1995, p.70)

信心(林知己夫, 1995, p.70; 吉野諒三, 2010, p.12)

宗教心(林知己夫, 1995, p.71; 吉野諒三, 2010, p.12, 101)

宗教的な心(林知己夫, 1995, p.70; 林文, 2010, p.194)

宗教的な感覚(林文, 2010, p.189)

素朴な宗教的感情(林知己夫, 1995, p.72; 林文, 2007, p.129; 吉野諒三, 2010, p.101)

宗教的な態度(吉野諒三, 2010, p.12)

ここで、筆者の、社会科学の領域における「用語」についての基本的な考え方ともいべきものについて述べておかねばならない。まず、自然科学と社会科学の違いという点から始めるならば、前者がそれぞれの個別科学 (discipline) の領域において、いわゆる独自の「専門用語」を発達させ、われわれが日常生活において使用している「日常用語」をそれら「専門用語」に置き換える努力を続けてきた。もちろん、初めから「専門用語」として作られた用語も多々あったが、いずれにしても自然科学の世界では、このようにして、個別科学ごとの「専門用語」の体系が見事に構築されてきた。それとは対照的に、社会科学の領域においては、相変わらず「日常用語」と「専門用語」が併用されるという状態が普通のこととなっている。例えば、ある専門領域の論文がある日常生活における特別な感覚あるいは感情についての「記述」から出発し、のちに、そのような問題が、その研究領域の「専門用語」を用いた議論へと段階的に展開していくということは決してめずらしいことではない。つまり、社会科学では、専門の論文・著作においても、そのなかで、積極的に「日常用語」を用いてきたのである。では、それは、なぜそうなのであろうか。思うに、社会科学という学問は、「社会的現実」にその研究の出発点が置かれるが、そこには、人間のさまざまな感覚・感情・感性がかかわってくる。そして、それらをそのまま含めて表現する言葉こそが「日常用語」にほかならない。そうだとするならば、社会科学の領域における「日常用語」には、とてつもなく重要な意味が含まれているといわなければならない。いい換えるならば、人間の「意味世界の探究 (盛山和夫, 2004 の用語)」の学としての社会科学にとっては、「日常用語」の持つ意味内容と意味連関への気づきとその吟味には、当該研究領域のさらなる発展にとって、きわめて重要な契機となるはずのものが含まれているといわなければならない。

以上のような社会科学という学問領域の根源的ともいべき性格を確認した上で、もう一度、上述の先行研究において用いられたさまざまな用語に立ち返ってみるならば、それらが、まさにここでいうところの「日常用語」にほかな

らないことがわかる。そして、それらの日常用語の「豊饒性」こそが、「宗教意識」というテーマの特徴をいかんなく示しているといえないであろうか。上述の国民性調査委員会の項目分類にもとづいて、「家」「身近な社会」「男女の差異」などのテーマごとに、ここで検討している宗教意識を表現する日常用語ほど多くの用語が提案されているかどうかを調べてみるならば、ここでの「豊饒性」は、いやがうえにも明らかとなってくる。こうして、宗教意識というテーマについての「日常用語の豊饒性」は、この研究領域に多くの示唆を与えることを約束しているといわなければならないのである。

それでは、以上に取りあげた先行研究における、筆者の用語でいうところの「宗教意識」の内容を表現するさまざまな用語に問題はないのかといえば、これまた、必ずしもそうとはいえない。

まず、「日常用語の豊饒性」ということから始めたい。確かに、それが「豊饒性」と表現されることから、そこには宗教意識の多次元性が示唆されており、この点において、宗教意識の「次元の細分化」の議論にとっては、豊かな手がかりが提供されているといわなければならない。しかし、それと同時に、つぎのような問題の所在も否定できない。例えば、中島国彦はその新著、『漱石の地図帳』（大修館書店、2018年）のなかで、夏目漱石が『吾輩は猫である』で登場人物について、近代的な明快な用語である「性格」は使わず、昔ながらの語感、多くは江戸的な感じを引きずっている言葉である「気性」「性分」「性（たち）」を多用しており、さらに「たち」という言葉についても、「質」や「性」など複数の漢字が使われていることに注目している。そして、この点について、つぎのように述べている。

同じ「たち」でも漢字が違うのは、それだけその語感が作者の意識の中で、未分化でたゆたっているからであろう。（p.59）

この指摘は、きわめて興味深い。このような観察を、以上の宗教意識を表現

するさまざまな用語に当てはめて考えてみるならば、じつは、これらの用語にも「未分化なゆたい」が現れているといえるかもしれないのである。それは、確かに「感じる」ことができる。しかし、中島国彦が指摘するように (p.129)、それは「合理的な理解」とはならない。やはり、「意味を理解する」ためには、そのための意味の「分化」と、それを実証的に確認する「科学的操作」ともいうべきもの——例えば、質問項目間の関係性の確認をとおして、そのような意味の理解を可能にする方策など——は不可欠なこととなる。そうだとするならば、このような点こそが、本稿の二次分析に求められることということになるであろう。

社会科学という研究領域が、その知的営為の過程と結果の言語的表現において、「日常用語」と「専門用語」を同時に使ってきたということについてはすでに述べた。宗教意識という研究領域においては、とくに欧米の宗教社会学を中心に、これまで多くの「専門用語」が誕生してきている。いうまでもなく、そのような概念化の試みは、それら諸概念の実証的な測定とは切っても切れない関係にある。こうして、新しい「専門用語」の誕生は、このような研究領域における「理論的考察」と「方法論的開発」を踏まえて、初めて可能となるものである。そこで、筆者の疑問は、つぎの点にある。

ここでの「日本人の国民性調査」にもとづく「日本人の宗教意識」の先行研究の担い手たち——林知己夫、林文、吉野諒三ら——は、なぜこのような宗教社会学の研究成果には関心を示してこなかったのであろうか。このような研究の担い手たちは、これら先行研究において、「統計的な方法」あるいは「データ分析の技法」については「専門用語」を使いながら、しかし、そのような「統計的な方法」あるいは「データ分析の技法」によって測定し、記述し、分析される人びとの「宗教意識」の内容については、なぜ「日常用語」のみを使ってきたのであろうか。さらにいえば、なぜそれらと深く関連することになる、社会科学の領域における人びとの一連の心的過程を表現する諸概念、例えば「欲求・要求 (need)」「動機 (motive)」「態度 (attitude)」「信念 (belief)」「意見 (opinion)」「行動 (behavior)・行為 (action)」「価値観 (values)」などの諸

概念、つまりこの研究領域の「専門用語」の援用は試みなかったのであろうか。

(2) 質問紙調査のデータ分析という研究領域においては、1980年以降、飛躍的な研究の発展が見られるようになり、膨大な研究の蓄積がなされるとともに、「世界社会学会」のRC-33の組織化や「ヨーロッパ社会調査学会 (European Survey Research Association : ESRA)」などの関連学会の設立という重要な出来事があった。このような研究領域の発展およびその組織化の動向が重要であるのは、それらをとおして、質問紙調査のデータ分析に方法的な標準化 (standardization) ともいうべき方向が確立してきたからにはほかならない。具体的にいうならば、それは、

- ・ Theoretical Discussion and Empirical Test
- ・ Toward Cumulative Knowledge
- ・ From Measurement Model to Causal Model
- ・ Conceptualization, Operationalization and Measurement
- ・ Reliability and Validity

などを中心とする、データ分析の基本的な考え方と実践のアイディアの確立といふことができる。

そして、このようなデータ分析の基本的な考え方と実践のアイディアが最も明確に示された研究成果として、われわれがデータ分析の reference study の一つとした M. Haller, R. Jowell と T. W. Smith 編になる *The International Social Survey Programme*, Routledge, 2009 をあげることができるのである。ここで、重要なポイントは、このような文献と比較した場合に、上述の先行研究におけるデータ分析は、このような考え方・アイディアとはやや異なる方法的な立場に立つものであるということである。

以上においては、「日本人の国民性調査」の一次分析という形でなされた研究成果——単行本・論文・報告書など——の渉獵と精査の結果について、ごく簡潔に述べてきた。本稿では、このような結果を踏まえて、つぎに筆者による独自の二次分析へと進んでいく。じつは、二次分析と呼ばれる実証科学的な知

「日本人の国民性調査」の二次分析の試み

—宗教意識に関する質問諸項目をめぐる理論的考察と方法論的検討—

的営為は、このように、従来の一次分析とは異なる方法論的な視座の準備があって、初めてその意義が主張できることになるのである。

Ⅲ. 二次分析のための理論的考察と方法論的検討

以上の先行研究をめぐる文献研究の結果の二点に対応させて、筆者は、本稿の二次分析の出発点を、以下のような「理論的考察」と「方法論的検討」に置くことにする。

1. 理論的考察

「日本人の国民性調査」（第13次調査：2013年実施）の調査票（質問紙）から、筆者の用語でいうところの宗教意識に関する質問諸項目を抽出する。これらの質問諸項目は、宗教意識をめぐる「理論変数」に対応する「経験変数」という位置づけがなされるはずのものである。そこで、これらの質問諸項目がどのような「理論変数」を前提としているのかの確認から出発するのが常道ということになる。

もっとも、以上のような記述において注意しておかなければならないポイントは、このような「理論変数」の確認ということ自体が、筆者の独自の二次分析の視座であるかもしれないということである。それは、筆者の視座からするならば、本来、質問諸項目というものは、調査の理論的な枠組みに導かれて作成されたはずのものであるが、「日本人の国民性調査」については、このような理論的考察の部分は必ずしも明確ではない。そこで、今回の二次分析においては、分析者の側で独自にそのような理論的考察を準備するというのが、ここでの行き方となる。

このような準備は、これまで定義しないまま使用してきた宗教意識という用語の理論的な意味内容をどのようなものと考えるかというところから始めなければならない。そして、それに続いて、宗教意識に関する具体的な質問諸項目についての理論的考察へと議論を進めていく。

筆者が、これまで「文献研究」と「実証研究」にもとづいて行ってきた「宗

「教社会学の諸概念の検討」の試みにおいて、第一に取りあげてきたのが、日本の宗教社会学における「宗教意識」という用語と、欧米の宗教社会学における「宗教性 (religiosity)」という用語であった。これらの用語の意味内容をめぐる詳細な検討結果については、本稿の末尾の筆者がこの研究領域において発表してきた諸論文を参照されたい。ここでは、今回の二次分析の目標の説明にとって必要不可欠と考えられる内容についてのみ記しておきたい。

まず、「宗教意識」という用語についていえば、例えば、「政治意識」という用語がそうであるように (真鍋, 1972)、それは、日本独自の用語であるといえるのではなかろうか。確かに、対馬路人 (1993) は、「宗教意識」の原語として英語の “religious consciousness” と、ドイツ語の “Religiosität” をあげている。これは、櫻井義秀 (2015) の「日本の宗教学は、はじめからそうであったように、主に西欧の宗教研究の強い影響のもとに展開されてきた」(p.14) という指摘がそのまま当てはまる事例といえるかもしれない。つまり、「宗教意識」という用語は、“religious consciousness”あるいは“Religiosität”の翻訳語として日本に定着したのではなかろうか、というのが筆者の仮説である。

ここで、「日本独自」という表現を使ったが、それは、以下のような点からも議論できるかもしれない。筆者は、「政治意識という用語が日本独自のものである」と述べた。それでは欧米のこの研究領域で、“political consciousness”という用語がまったく使われないのかということ、決してそうではなく、それは Robert Lane らによって使われていることは忘れてはならない——例えば、*Political Thinking and Consciousness*, Markham Publishing Company, 1969 などあげられる——。しかし、とくにアメリカ政治学においては、“political attitude”という用語がより一般的であるのに対して、“political consciousness”という用語の使用がより限定的であることは否定できない。それとは対照的に、日本の政治学においては、「政治意識」の方がより一般的で、「政治態度」の方がより限定的である。

では、「宗教意識」と「宗教性」という用語の場合はどうかというと、すでに述べたように、日本では「宗教意識」という用語の使用法がより一般的で、

「日本人の国民性調査」の二次分析の試み

—宗教意識に関する質問諸項目をめぐる理論的考察と方法論的検討—

「宗教性」のそれはより限定的である。欧米においてはどうかというと、近年の欧米の宗教社会学の文献において“religious consciousness”という用語が使われる事例を、筆者は寡聞にして知らない。そして、いうまでもなく、それらの文献において、最も一般的に使われている用語が“religiosity”にはかならない。因みに、“religiosity”という用語についての理論的な系譜については、真鍋(2016 b)を参照されたい。

ここでは、以上の「宗教意識」と「宗教性」という用語について、筆者の「理解」しているところ——ここで「理解」という用語で意味するところのものは、「文献」の用語解説をとおしての理解や、辞書的な意味での理解ということを超えて、「国際学会」や「国際会議」などにおける海外研究者との直接対話、そしてさらに、「共同研究」や「共同調査」の機会、をとおしての理解ということまでを含めている——について述べておきたい。

まず、日本における「宗教意識」という概念であるが、それは、広く「宗教」に関する人びとの見方・考え方・感じ方——「行動の仕方」については、すでに述べた「政治意識」の場合と同様に、それを「意識」のなかに含める仕方と、それを「意識」と区別して、そこには含めない仕方の二つがある——ということで、したがって、そこには「宗教」についてのさまざまな側面と、「宗教」に対する人びとのさまざまな「意識」のベクトルが含まれることになる。

それに対して、欧米における「宗教性」という概念——とくに“church religiosity”という概念——についていえば、それは、「宗教意識」よりも狭い概念であり、まさに「宗教」という対象 (referent) に対する直線的なオリエンテーションであり、真直ぐにそこに「向かっていく」というという「意識」の方向性がポイントとなっており、その意味で次元性 (unidimensionality) が想定されている。

以上を簡略化して表わすならば、図1のようになるであろう。

以上は、どこまでも、それぞれの概念について、筆者の「理解したところ」を記したものであって、この点については、今後のさらなる検討が必要である

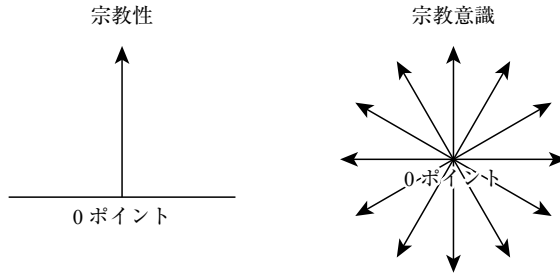


図1 「宗教性」と「宗教意識」の概念の図式化

ことは、いうまでもない。そのような検討は、例えば、『社会学の言語』——Herman, 原山, 樋口訳（1993）——という問題関心につながっていくものである。

以上の議論を踏まえて、では、「日本人の国民性第13次調査」においては、どのような「宗教意識」に関する質問諸項目が使用されているかという、それは以下のとおりである。

表1 「日本人の国民性調査」における「宗教意識」に関する質問諸項目

問 11 あなたはどちらかといえば、先祖を尊ぶ方ですか、それとも尊ばない方ですか？				
1	2	3	4	5
尊ぶ方	普 通	尊ばない方	その他〔記入 〕	わからない
問 12 a) 宗教についておききたいのですが、たとえば、あなたは、何か信仰とか信心とかを持っていますか？				
1	2			
持っている、信じている	持っていない、信じていない、関心がない			
b) それでは、いままでの宗教にはかわりなく、「宗教的な心」というものを、大切だと思いますが、それとも大切だとは思いませんか？				
1	2	3	4	
大 切	大切でない	その他〔記入 〕	わからない	
問 13 あなたは「あの世」というものを、信じていますか？				
1	2	3	4	5
信じる	どちらとも きめかねる	信じては いない	その他〔記入 〕	わからない

「日本人の国民性調査」の二次分析の試み

—宗教意識に関する質問諸項目をめぐる理論的考察と方法論的検討—

すでに述べたように、「日本人の国民性調査」の場合は、個々の質問諸項目を位置づける理論的考察ともいべきものが必ずしも明確でない。そこで、筆者による二次分析の出発点においては、何よりもまず、これらの質問諸項目と、宗教社会学の領域における諸概念の在庫目録 (inventory) との「接ぎ木」——ここでは、内村鑑三の「武士道の上に接木されたるキリスト教」(『聖書之研究』186号, 1916年, p.1) という表現を踏まえている——の試みが重要な課題となってくる。

問 11 あなたは、先祖を尊ぶ方ですか、それとも 尊ばない方ですか？

社会調査において、一つの質問項目は、通常、一つの変数として扱われる。ところが、社会調査のデータ分析の実践をととして、一つの質問項目には、複数の「次元 (dimension)」が含まれていることがわかってきた——このような知見を体系的な調査理論にまとめあげたものこそが、L. Guttman の“Facet Approach”にほかならない (真鍋, 2002 などを参照されたい) ——。例えば、筆者は、近年、ヨーロッパの国ぐににおいて、人びとの教会所属を尋ねる質問項目には、「主体的な信仰 (faith) という次元」とともに、「社会的な慣習 (custom) という次元」の二つの次元が含まれるようになってきたことを明らかにした (真鍋, 2011 a, 2011 b)。

このようなデータの分析の事例研究を踏まえていうならば、「日本人の国民性調査」の上述の問 11 の場合も、この質問項目には「伝統的な慣習という儀礼 (ritual) の次元」と「先祖崇拜という信念 (belief) の次元」の二つの次元が含まれているといえるかもしれない。

この後者の「先祖崇拜」というのは、一般に、生きている子孫の日常生活に、亡くなった祖先がさまざまな影響を与えているという、人びとに共有された信念を意味する。子孫は、災厄から守られ、よい生活が送れるようにと祖先に保護を求める儀礼を行なう。この儀礼が先祖祭祀と呼ばれるものである (小松, 1977)。では、なぜ、先祖は子孫の日常生活に影響を与えるという信念が生ま

れてきたのであろうか。それは「ヒトは死んでカミになる、先祖になるという観念」(山折, 2018)があったからにほかならない。

ところが、このような「先祖崇拜」という事例においても、その後の実証研究をとおして、そのような「抽象化・一般化された信念ともいうべき次元」と「子孫たちにとっては個人的なかかわりの体験によって自分の記憶に残っている具体的・個別的な先祖への personal feelings という次元」とが概念的に区別されることになる(後者については、「メモリアリズム」という用語が用いられる:Freedman, 田村, 瀬川訳, 1974 = 1995)。

ここで、以上のような理論的考察を準備しておくならば、以下のデータ分析によって確認すべき諸仮説が、そこから確実に導かれることになるのである。

問 12(a) あなたは、何か信仰とか信心とかを持っていますか？

問 12(a)は、欧米の宗教社会学において、Religious Denomination として概念化されてきたものに対応している。Religious Denomination は、本来、Affiliation, Belonging あるいは Membership の次元を表わすものとして概念化されてきた。そして、そのような次元を捉える質問項目としては、一般に、「あなたは、どの宗教集団に属していますか」というものが用いられてきた。ところが、時を経て、欧米社会においても、「宗教意識の変化」と呼ばれる現象が現われてくる。それは“Privatization” “Individualization” “Personalization” という諸概念を用いて説明が試みられてきた。そのような宗教社会学の理論は、「宗教変形理論 (Religious Transformation Theory)」と呼ばれることもある(真鍋, 2010 ; Jagodzinski と真鍋, 2015 b)。宗教意識が、そのような変化を経験することをとおして、Affiliation や Membership をともなわない Religious Faith もあり得るのではないかという考え方がでてくることになる。そして、そうだとするならば、そのような欧米社会における宗教意識の側面は、日本の状況に近づいてきたともいえるかもしれない。いうまでもなく、現在の日本の宗教においては、Affiliation や Membership という考え方はなじまない

「日本人の国民性調査」の二次分析の試み

—宗教意識に関する質問諸項目をめぐる理論的考察と方法論的検討—

ものとされてきたので、このような Religious Denomination の日本語での質問項目としては、「あなたは何か宗教とか信心とかを持っていますか」というものが用いられることになったのである。

さらに、もう一つの論点は、欧米の宗教意識の変化を「世俗化 (secularization)」という視座から捉えるものである。そのような視座からするならば、Religious Denomination が、たとえ Affiliation あるいは Membership という形態をとまなうものであるとしても、それは「宗教的な信仰」というよりも、むしろ「生活上の慣習」といったものに変化してきており、したがって宗派・教団への所属が、いわば「名目上のメンバーシップ (nominal membership)」ともいうべきものになってきているのである (真鍋, 2014)。

以上のような理論的考察にもとづくデータ分析は、国際比較という視座を導入した場合、きわめて興味深いものになるであろう。

問 12(b) いままでの宗教にはかかわりなく、「宗教的な心」というものを、大切だと思いますか、それとも大切だとは思いませんか？
--

この質問項目は、日本人の宗教意識を捉える質問の一つとして統計数理研究所において独自に開発されたものであるとされている。しかし、それにもかかわらず、筆者による文献研究からするかぎり、この質問項目のねらい・目的・意図は必ずしも明らかではない。それは、すでに述べたように、「日本人の国民性調査」においては、調査票（質問紙）の作成とそれを用いた実査に先立って、理論的考察が展開されるというスタイルをとっていないということによるものといえよう。

そして、もう一点考えられることは、「日本人の国民性調査」の特徴が、「事前仮説検証型」であるよりも、「事後仮説探索型」であるという点にあることである。この点は、とくに「宗教的な心が大切か」という質問項目についての先行研究のさまざまな記述から明らかとなる。

例えば、「第1回日本人の国民性調査」の報告書——統計数理研究所国民性調査委員会編『日本人の国民性』至誠堂、1961年——には、つぎのような記述がある。

「宗教的な心が大切であるか」という質問を行ない、反宗教がどのくらいあるかを明らかにしようとした。また、「宗教的な心が大切か否か」というだけでは不十分なので、「吟味調査」——調査結果の解釈をどの範囲にまで広げて行なうことが可能かを探るという目的でなされた調査——では、「なぜ大切なのでしょう（あるいは大切でないのでしょうか）」というようにその理由を尋ね、回答の内容を明らかにしようとした。(p.40)

因みに、では、このような「吟味調査」の結果から何がわかったかというところ、
「大切」という回答者のうち「心のよりどころ」とか、「心のささえ」などの回答が約20%、「精神修養」などの回答が約10%で、その他はまちまちな回答となっている。そして、それに対して「大切でない」という回答者のうち、はっきりとした理由をあげたものは1/3にとどまっているという。以上から、つぎの二点を確認できる。

①「宗教的な心が大切か」という質問項目のねらい・目的・意図は、「反宗教的な意識」の存在を捉えるというところにあった。確かに、この点については、林文（2007）も、「宗教的な心とは何か。宗教という言葉に対して否定的でないことは確かである」（p.140）と書いている。

そして、そうだとするならば、このような「反宗教的な意識」や「宗教に対する否定的な意識」といった意識の概念化の試みには、政治学の領域における「支持政党」の対立概念としての「拒否政党」という理論変数と、それを実証的に測定するための経験変数としての「あなたが決して支持したくないと思われる政党はどの政党でしょうか」という質問項目の開発のアイディアと一脈通ずるところがある。後者は、かつて、政治学者の三宅一郎によって提案された

「日本人の国民性調査」の二次分析の試み

—宗教意識に関する質問諸項目をめぐる理論的考察と方法論的検討—

アイディアであり、こうして、「支持政党」と「拒否政党」を組み合わせることによって、「政党支持の幅」と呼ばれる、この研究領域における画期的な分析概念が作られることになったのである（三宅, 1998）。いうまでもなく、「拒否政党のない者」というのは、「すべての政党にわたるほどの広い政党支持の幅を示す者」ということを意味している。

そこで、以上のような「政党支持の構造」の研究のアイディアを、「日本人の宗教意識」の諸相・構造・性格を探るための視座の一つに置いて、「日本人の国民性調査」における上述の間 12(a)と間 12(b)に対する回答の %——「その他」「わからない」を除いた場合の回答の %——をくらべてみるならば、

〈間 12 (a)〉

信仰を持っている 28%

信仰を持っていない 72%

〈間 12 (b)〉

「宗教的な心」は大切である 76%

「宗教的な心」は大切でない 24%

という結果となっており、人びとの「宗教性」——ここでは、「宗教意識」ではなく、「宗教性」という用語を用いる——の幅は、間 12(b)の形で尋ねられた場合の方で大きなものとなっていることがわかる。つまり、日本人の「宗教性」のレベルについて議論する場合、それはどの measure によって測定するかによって結果に違いがでてくるのである。

こうして、ここでの二次分析において、「日本人の宗教性の幅」という分析概念を導入することで、どのようなプロミシングなデータ分析が示唆されることになるかの検討が、つぎの重要な課題となってくる。

②上述の「日本人の国民性調査」の報告書（国民性調査委員会編, 1961）において、「吟味調査ではその理由を尋ね、回答の内容を明らかにするようにした」（p.40）と書かれているが、この記述から、「日本人の国民性調査」においては、事前に質問項目の意味内容が仮説的に設定されるのではなく、むしろ

それが事後に探索的に検討されていることがわかる。

因みに、一次分析の担当者の一人である林文（2010; 2007）のつぎのような指摘も、このような記述と同じ線上にあるものといえるであろう。

「日本人の国民性調査でも、近年まで、『宗教的な心』という言葉で、それとなくわかった気持になっていた……。」（2010, p.195）

「この調査（『日本人の素朴な宗教的感情に関する調査』）の目的は、宗教的な心とは何か、素朴な宗教的感情とは何かを探ることであった。」（2007, p.132）

このような方法論的な立場は、L. GuttmanのFacet Approachの考え方（真鍋, 2002）や、S. Schwartzの「人びとの価値観を捉える質問諸項目についての理論的な意味内容の検討」の考え方（真鍋, 2016 a, 2017, 2018 a）とは大きく異なるものといわなければならない。これら二つのデータ分析の考え方については、これまで必ずしも具体的な議論がなされてきているわけではない。このようなデータ分析をめぐる方法論的な議論も、「二次分析の試み」においては、きわめて重要な研究課題となるはずのものである。

因みに、ここでは、「具体的な方法論的な議論」という表現を用いたが、そのような研究事例としては、筆者によるつぎの文献を参照されたい。

真鍋一史「宗教意識の国際比較——『因子分析』と『最小空間分析』に関する方法論的検討——」『青山地球社会共生論集』（第3号；2018年）。

最後に、「宗教的な心」についての質問項目をめぐる、もう一つの論点についても記しておきたい。それは、何よりもまず、一次分析を担当してきた研究者が、「『宗教的な心』というのが日本人の宗教に対する考え方の特徴である」「『宗教的な心』は日本人の基底意識ともいえる」（林文, 2007, p.131）という考え方に立っているということである。そして、その結果、それが日本人の独自の考え方であるので、外国人、とくに欧米の人びとには理解されてこなかっ

たというニュアンスが感じられる。その証拠に、林文は、そのことが「近年、西洋でも認識されるようになってきた」と続けている（林文, 2007, p.131）。そして、おそらくは、そうであるからこそ、「宗教的な心」という用語の英語訳は困難であると感じられてきたのではないだろうか。再び、林文（2007）はつぎのように書いている。

「宗教的な心」という言葉については、国際比較ではとくに問題となる。何度かの調査における英語でも一貫しておらず、religious heart, religious mind, religious attitude などが用いられている。調査対象の国・地域と十分な検討を行なっているが、未だに確定できずにいる。」（p.148）

ここで、国際比較調査とは、「国民性七か国比較調査」「東アジア国民性比較調査」「東アジア価値観調査」などを指すものと考えられる。因みに、「日本人の国民性調査」での「宗教的な心」の英訳は、一貫して religious attitude が用いられている。

こうして、今回の二次分析の重要な課題として、以上のような「宗教的な心」という用語についての、いわば「日本人・社会・文化」論的な考え方——真鍋一史「文化的ナショナリズム」『国際イメージと広告』日経広告研究所, 1998年を参照されたい——の実証的な再検討の必要性が提起されるのである。それは、筆者は、これまで、さまざまな国際比較調査のデータ分析をとおして、欧米のキリスト教社会における宗教意識の変化を探る試みを続けてきているが、そこでは、いわば「日本的な宗教意識」とされてきたものと近い「見方・考え方・感じ方」も見出されるようになってきており——例えば、「山、川、草、木などすべての現象に魂が宿っていると思う」という質問項目について、それを肯定する回答の％は日本で31%であるのに対して、ドイツでは38%となっている（真鍋, 2009）、ヨーロッパの国々においても、キリスト教的な「復活」に替って「生まれ変わり」というアジア的な考え方が浸透してきている（Jagodzinski と真鍋, 2015 a）などの知見があげられる——、さらに、欧米の宗教

社会学の領域においても、つとに“religious mind”という用語が用いられるようになっていく—— R. Stark and R. Finke (2000). *Acts of Faith: Explaining the Human Side of Religion*. University of California Press. pp.42-56. ——からにはかならない。

問13 あなたは、「あの世」というものを信じていますか？

これまで、さまざまな時代と国と宗教において、「あの世」「来世」「死後の世界」がどのようなものかについて、多様な信念が存在してきたことが示されている（中村, 2018）。

ここで重要なポイントは、これまで人びとの宗教意識を構成する主要な要素として、「あの世・来世・死後の世界」と並んで、「神・仏」「天国・極楽・浄土」「地獄」「霊」「奇跡」などの存在について尋ねられてきたということである。欧米の宗教社会学の枠組みからするならば、これらの諸項目は「教義 (dogma)」あるいは「教理 (doctrine)」を構成する諸要素として位置づけられてきており、したがって、それらすべてについてその存在を肯定するというように、その一貫性・斉一性・統一性が重要であった。いうまでもなく、そのような前提のもとに、「信念体系」——「一つの信念」ではなく——という表現が意味あるものとして使われてきたのである。ところが、時を経て、欧米の国ぐににおいても、人びとの志向性のなかに、「あれもこれも」から「あれかこれか」という個人的選択の方向がでてくることになった。このような宗教意識の変化は、「フルコース」から「アラカルト」へと比喩的に表現されることもある (Dobbelaere, 1981; 1995; 2002)。

この質問項目に関する、さらにもう一つの論点として、以上にあげたような、いわゆる「宗教的シンボル」ともいべきものに対する人びとの信念における「世代間の違い」ということがある。この点について、例えば、松谷 (2007) は、NHK 放送文化研究所の「日本人の意識」調査結果を、つぎのようにまとめた

いる。

世代間の違いは明白である。高年層では「神」や「仏」を信じている人が多いのに対して、「奇跡」や「あの世」を信じている人は少ない。一方、若年層では「奇跡」や「あの世」を信じている人が多く、「神」や「仏」を信じている人は少ない。(p.39)

では、なぜ、このような世代間の違いがでてくることになるのであろうか。筆者の仮説は、つぎのとおりである。

まず、高年層の回答傾向には、いわば伝統的な宗教意識とも呼ばれるものが表出しており、それは一方で「神」や「仏」の存在については、それをいわば習慣的に (habitually) 信じ続けているものの、他方でその同じ線上で、「奇跡」や「あの世」という宗教的シンボルに対しては、そのリアリティや象徴的な力を感じることができにくくなりつつある。

それに対して、若年層の回答傾向には、一方で「神」や「仏」を信じるといった伝統的な宗教意識の「社会化 (socialization)」とその「継承」の困難性が示されているとともに、他方でマンガやアニメ、あるいはインターネット空間といった領域に織り込まれている「奇跡」や「あの世」のイメージ、そして、広い意味でのスピリチュアリティ現象との接触の機会をとおして培養 (cultivate) されてきた、いわゆる新しい「宗教的な」感覚ともいべきものの発露が示されている。

以上において、「日本人の国民性調査」で用いられている宗教意識に関する4つの質問項目についての若干の理論的考察を試みた。いうまでもなく、それらは必ずしも十分な理論的考察といえるものにはなっていないかもしれない。しかし、少なくとも、このような理論的考察を準備することで、初めて独自の二次分析を出発させることが可能となるということも否定できない。

2. 方法論的検討

繰り返しになるが、以上は、筆者による「日本人の国民性調査」の二次分析のための「理論的考察」というものであった。では、二次分析にとっては、このような「理論的考察」だけで十分であろうか。筆者の「社会科学論」的な立場からするならば、そのような「理論的考察」と合わせて、いわばデータ分析の「両輪」ともいうべきものとなる「方法論的検討」が不可欠のものとして要求されることになる。

では、そのような「方法論的検討」の具体的な内容として、どのようなことを考えておかなければならないであろうか。それは、いうまでもなく、データ分析で取りあげる質問諸項目間の「関係性」の検討ということである。例えば、Merton, 森ほか訳（1957 = 1951）は、つぎのように述べている。

概念というのは観察されるべき事柄を限定する（規定する）ものであり、変数であって、この変数間の経験的關係こそ探求しなければならないものなのである（p.82）。

そして、これまでの人間行動の諸法則の定式化をめぐる“cumulative knowledge”の在庫目録からするならば、そのような質問諸項目間の「関係性」——関係の有無、関係の方向、関係の大小——は、それら諸項目の「意味内容」の側面だけでなく、それら諸項目で扱われる人間行動（質問紙に回答するという形での行動）の「種類」の側面——例えば、それらが、L. Guttmanによって構築されたFacet Theoryの用語でいえば、attitude, intensity, closure, involvementなどのいずれかに該当するか（真鍋, 2002）——によっても、大きな影響を受けるものであることがわかっている。

では、このような「方法論的視座」からするならば、「日本人の国民性調査」で用いられている宗教意識に関する質問諸項目は、どのように性格づけることができるであろうか。このような検討の結果は、以下のように示すことができるであろう。

問 11 先祖を尊ぶか？

1. 尊ぶ → ポジティブな方向
2. 普通 → 0 ポイント
3. 尊ばない → ネガティブな方向

問 12(a) 信仰・信心を持っているか？

1. 持っている・信じている → ポジティブな方向
2. 持っていない・信じていない → ネガティブな方向

問 12(b) 「宗教的な心」は大切か？

1. 大切 → ポジティブな方向
2. 大切でない → ネガティブな方向

問 13 「あの世」を信じているか？

1. 信じる → ポジティブな方向
2. どちらともきめかねる → 0 ポイント
3. 信じていない → ネガティブな方向

以上から、これら 4 項目は、Guttman の用語でいうならば、attitude, belief あるいは values といった「content の方向」で構成されているものの、その選択肢の「表現形式」の点においては、それらは①ポジティブとネガティブの相対する方向からなる形と、②真ん中に 0 ポイントを置き、その両側にポジティブの方向とネガティブの方向を配した形、という二つのタイプに分けられることがわかる。そして、データ分析の「経験則 (a rule of thumb)」からするならば、このような選択肢の「表現形式」によっても、質問諸項目間の「関係性」は大きな影響を受けるのである。このような問題点は、今後のデータ分析にどのようなかかわってくるであろうか。

以上のような「理論的考察」と「方法論的検討」を踏まえて、初めて、筆者の独自の二次分析としてのデータ分析が可能となってくるのである。

IV. おわりに

本稿は、筆者による「日本人の国民性調査」の二次分析の試みについて報告するものである。二次分析のためには、一次分析とは異なる新たな「視座」が必要となる。そのような「視座」は、筆者の独自の「理論的考察」と「方法論的検討」という形で提示される。

本稿では、まず前者については、「日本人の国民性調査」で用いられた宗教意識に関する4つの質問項目についての理論的な背景を、欧米の宗教社会学の諸概念と対照させながら考察した。

つぎに後者については、これら質問諸項目の選択肢の「表現形式」というところに焦点を合わせて検討した。その結果、これら4項目は、Guttmanの用語でいうならば、いずれも人びとのオリエンテーションの「方向」、つまり attitude, beliefあるいは values という「内容」のものといえるものの、その選択肢の「形式」からするならば、問11と問13が真ん中に0ポイントを置き、その両側にネガティブの方向とポジティブの方向を置いた形となっているのに対して、問12の(a)と(b)には、0ポイントはなく、ネガティブの方向とポジティブの方向のみからなる形となっていることがわかった。

質問紙調査のデータ分析は、質問諸項目の相互間の関係性の分析を、その中心的な課題とする。それは、Merton, 森ほか訳(1957 = 1961)の指摘するように、「概念というものは観察さるべき事柄を限定する(規定する)ものであり、変数であって、この変数間の経験的關係こそ探求しなければならないものである」(p.82)からにほかならない。

そして、質問諸項目間の関係性の分析においては、そのための「青写真」あるいは「ロードマップ」ともいうべきものが必要となる。ここでは、まさに、以上のような「理論的考察」と「方法論的検討」が、このような「青写真」あるいは「ロードマップ」の役割を担うのである。

「日本人の国民性調査」の二次分析の試み

—宗教意識に関する質問諸項目をめぐる理論的考察と方法論的検討—

こうして、「日本人の国民性調査」の宗教意識についての質問諸項目をめぐる二次分析としてのデータ分析の準備が整ったのである。

〈文献〉

- Berger, Peter L. and Luckman, Thomas, 山口節郎訳 (1966 = 1977). 『日常世界の構成』新曜社.
- Dobbelaere, K. (1981). *Secularization*, Sage.
- Dobbelaere, K. (1995). Religion in Europe and North America. In R. de Moor (Ed.), *Values in Western Societies*. Tilburg University Press.
- Dobbelaere, K. (2002). *Secularization: An Analysis at Three Levels*. Publishing Group Peter Lang.
- Freedman, Maurice, 田村克己, 瀬川昌久訳 (1966 = 1995). 『中国の宗教と社会』弘文堂.
- Haller, Max, Jowell, Roger and Smith, Tom W. eds. (2009). *The International Social Survey Programme 1984-2009: Charting the Globe*, Routledge.
- 林文 (2007). 「社会調査から見る宗教・素朴な宗教的感情と死生観」『死生学年報』第3巻, 東洋英和女学院大学死生学研究所.
- 林文 (2010). 「宗教心」『国際比較データの解析』朝倉書店.
- 林知己夫 (1995). 『数字から見た日本人のこころ』徳間書店.
- 林知己夫, 林文 (1995). 「国民性の国際比較」『統計数理』第43巻1号.
- Herman, Jacques. 原山哲, 樋口義弘訳 (=1993) 『社会学の言語』白水社.
- Hyman, Herbert H. (1972). *Secondary Analysis of Sample Survey*, Wesleyan University Press.
- Jagodzinski, Wolfgang と真鍋一史 (2015a). 「ヨーロッパの国々における宗教意識の変容——『国際比較調査』のデータ分析——」『関西学院大学社会学部紀要』第120号.
- Jagodzinski, Wolfgang, 真鍋一史 (2015b). 「ヨーロッパの国々における宗教と道徳の多元主義——理論的考察と実証的知見——」『関西学院大学社会学部紀要』第122号.
- 小松和彦 (1977). 「祖先崇拜」『文化人類学事典』ぎょうせい.
- Lane, Robert (1969). *Political Thinking and Consciousness*, Markham Publishing Company.
- 松谷満 (2007). 「宗教研究の方法：世論調査」『よくわかる宗教社会学』ミネルヴァ書房.
- 真鍋一史 (1972). 「政治意識とコミュニケーション」『コミュニケーション行動の理論』慶應通信.
- 真鍋一史 (1998). 「文化的ナショナリズム」『国際イメージと広告』日経広告研究所.
- 真鍋一史 (2002). 「ファセット：ファセット・デザイン, ファセット・アナリシス, ファセット・セオリー」『ファセット理論と解析事例』ナカニシヤ出版.
- 真鍋一史 (2009). 「『宗教意識』の構造——日本とドイツにおける国際比較——」『関西学院大学社会学部紀要』第107号.
- 真鍋一史 (2010). 「欧米社会学における宗教理論と宗教調査」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第4号.
- 真鍋一史 (2011a). 「宗教性の諸相とその構造の国際比較——ISSPのデータ分析——」『関

- 西学院大学社会学部紀要』第 111 号。
- 真鍋一史 (2011b). 「ポストモダンの社会における宗教の変容——スウェーデンにおける事例研究——」『関西学院大学先端社会研究所紀要』第 6 号。
- 真鍋一史 (2012). 「特集 データ・アーカイブと二次分析の最前線 社会科学はデータ・アーカイブに何を求めているか」『社会と調査』第 8 号, 社会調査協会: 有斐閣。
- 真鍋一史 (2014). 「国際比較調査のデータ分析の課題と展望——『宗教意識調査』を事例として——」『関西学院大学社会学部紀要』第 118 号。
- 真鍋一史 (2016a). 「価値観研究のフロンティア——Circumplex モデルから Radex モデルへ——」『青山地球社会共生論集』創刊号。
- 真鍋一史 (2016b). 「『宗教性』の概念・測定・分析——『8 か国における宗教意識調査』を事例として——」『関西学院大学社会学部紀要』第 125 号。
- 真鍋一史 (2017). 「国際比較の視座からする Schwartz の『価値観モデル』の実証的な検討——『世界価値観調査』のデータ分析——」『青山地球社会共生論集』第 2 号。
- 真鍋一史 (2018a). 「Schwartz の『価値観研究』の方法論的な検討」『関西学院大学社会学部紀要』第 129 号。
- 真鍋一史 (2018b). 「宗教意識の国際比較——『因子分析』と『最小空間分析』に関する方法論的検討——」『青山地球社会共生論集』第 3 号。
- 丸山真男 (1956). 「政治学」『社会科学入門』みすず書房。
- Merton, Robert K., 森東吾ほか訳 (1957 = 1961). 『社会理論と社会構造』みすず書房。
- 三宅一郎 (1998). 『政党支持の構造』木鐸社。
- 中村圭志 (2018). 『人は「死後の世界」をどう考えてきたか』角川書店。
- 中島国彦 (2018). 「漱石の地図帳」大修館書店。
- 櫻井義秀 (2015). 『よくわかる宗教学』ミネルヴァ書房。
- 盛山和夫 (2004). 『社会調査法入門』有斐閣。
- Stark, Rodney and Finke, Roger (2000). *Acts of Faith: Explaining the Human Side of Religion*. University of California Press.
- 対馬路人 (1993). 「宗教意識」『新社会学事典』有斐閣。
- 統計数理研究所国民性調査委員会編 (1961). 『日本人の国民性』至誠堂。
- 内村鑑三 (1916). 「武士道と基督教」『聖書之研究』第 186 号。
- 山折哲雄 (2018). 「死んで葬られる地上のカミガミ」『朝日新聞 (2018 年 7 月 28 日)』
- 吉野諒三 (1994). 「国民性意識の国際比較調査研究」『統計数理』第 42 巻 2 号。
- 吉野諒三 (1998). 「健康と生活満足」『国民性七か国比較』出光書店。
- 吉野諒三 (2001). 『心を測る』朝倉書店。
- 吉野諒三 (2010). 「歴史とパラダイム」「自然観と生命観」『国際比較調査データの解析』朝倉書店。

Secondary Analysis of the Japanese National Character Survey: Theoretical Considerations and Methodological Examinations on Question Items Concerning Religious Consciousness

Kazufumi Manabe

The purpose of this paper is to inquire into the various aspects, structure and character of Japanese religious consciousness by conducting a secondary analysis of the Japanese National Character Survey (the 13th nationwide survey) data.

The survey has been carried out every five years since 1953 by the Institute of Statistical Mathematics (ISM). More detailed information is available on ISM's home page of the Japanese national character study (<http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/index.html>).

Secondary analysis is a type of research in which data collected by others are reanalyzed based on the analyzer's own theories, hypotheses and methods. In the fields of sociology and political science, secondary analysis is already the most common form of empirical research.

In this paper, I start my secondary analysis of the Japanese National Character Survey with the theoretical considerations and methodological examinations on question items used in this survey. Regarding the former aspect, I discuss the conceptualization and operationalization of each question item, and regarding the latter aspect, I examine the form of its response category.

Based on these considerations and examinations, I will go on to the next step of the secondary analysis, namely the statistical analysis of the survey data.